

# C・ライト・ミルズの都市社会研究における高等教育への視点

—— 都市問題とシティズンシップ教育に関する試論 ——

高 田 正 哉

研究室紀要 第41号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2015年7月



# C・ライト・ミルズの都市社会研究における高等教育への視点

## ——都市問題とシティズンシップ教育に関する試論——

高 田 正 哉

### 1. はじめに

高等教育はますます多くの役割を担うように求められるようになってきた。いまや高等教育機関は、単に学術研究、専門教育、教養教育の場であるというばかりではなく、地域貢献や生涯学習の場であることが求められている。地域と教育の関係について論じている研究者である佐藤一子は、「大学の地域連携を推進するには、その理念・方法・地域との協力態勢・研究教育活動や学生の学習面での深まり、受け入れる地域、住民諸団体と大学間の信頼関係や双方向的な研究の発展など、時間をかけた関係づくりが必要である」（佐藤：2015, 16頁）と述べている。高等教育機関は、グローバル化することが求められる一方、地域に根ざした教育機関であることも求められている。従来の高等教育改革においては、大学のグローバル化および産学連携が主要な論点であり、地域社会・ローカリティという視点に立つ意見は少なかった。というのも、大学は「地域社会において中立的であると同時にその心理的距離から、地域社会の構成員でありながらもやや疎遠な存在であった」（小松：2008, 9頁）からである。だが、現代社会において高等教育が研究ばかりでなく様々なニーズに答えなければいけない状況になったために、大学に地域貢献などの新しい役割が求められるようになってきたのである。

本稿の目的は、高等教育が地域社会にどのように関与するべきかについて、理論的・思想的観点から考察することである。従来の教育哲学・教育史と関わる高等教育研究では、その主要な関心はリベラル・エデュケーションや大学の理念の研究に向けられてきた。だが本稿では、「大学と地域」という課題を踏まえ、社会学における高等教育研究へと目を向ける。ただし、本稿で考察される社会学とは、高等教育の社会的機能の分析や、階層論とは関連しない。むしろ、本稿はアメリカ社会学で行われてきた都市

社会学の研究および地域社会研究における高等教育論に目を向ける。というのも、アメリカ社会学は都市問題や地域問題の解決という実践的課題を持っているからである<sup>1)</sup>。

そこで筆者が着目するのが、チャールズ・ライト・ミルズ（Charles Wright Mills, 1916-1962）の高等教育論である。ミルズは一般的には『ホワイトカラー』（*White collar: The American Middle Class*, 1951）をはじめとした大衆社会の研究者として知られている。ではなぜミルズに着目するのか。それは、ミルズが地域の中心として高等教育機関を構想していたからである。ミルズは大学を「現実に関する適切な規定を『求めて、努力し』、それを明らかにし、そして、それにもとづいた生活と行動を行う公衆を育成し、かつ、支援すること」（Mills: 1954, p.373=298頁）が高等教育の目的であると述べている。ミルズによると、公衆（publics）は第一に地域社会の中心となる存在であり、第二に自己の生活経験から都市問題を考えて解決をはかる存在である。つまり、ミルズは都市問題、地域問題を主体的に解決する公衆を高等教育で育てることを目指しているのである。したがって、ミルズの高等教育研究は、いかにして都市問題を解決するか、というアメリカ社会学研究の文脈に則ったものであるといえる。

ところが、先行研究において、ミルズの高等教育研究は、マス・メディアおよび大衆社会への批判という点が強調されていた。ジルーはミルズの特徴を「大衆社会化による公共性の喪失」について論じたものであるとした（Giroux: 1987, p.109）。国内の先行研究では、伊奈正人らによる研究がある。伊奈らは「社会科学は本来持っていた批判性を失っている」（伊奈：2007年、235頁）と述べる。そして、ミルズの教養教育論とはそういった「批判」を取り戻すことによって民主主義社会が本来持っていた問題へと目を向けることを可能とするものであるとされたのである。これらの先行研究はミルズの高等教育研究

を次のように評価していると言える。すなわち、ミルズは「大衆社会」という問題状況を克服するために、後述する「批判的スタイル」を身につけるものである、という評価である。確かにミルズの高等教育論はアメリカ大衆社会とその批判という論点は重要であろう。しかし、アメリカ社会学や先行研究の文脈に回収されない特徴がミルズの主張には含まれている。それは、ミルズの考える公衆とは都市問題を自己の生活経験から考えるという点である。ミルズの考える公衆が自己の生活経験から思考を開始する理由は、以下の二つの問題を考えることで理解できる。第一の問いとは、ミルズが描いた高等教育機関とは具体的にどのような機能を社会で発揮することになっているのだろうかという問いである。第二の問いとは、なぜミルズは「都市問題」という地域性や特殊性の強い事項を取り上げるのであろうかという問いである。

筆者はミルズの描く公衆像の特異さが、今日の高等教育に望まれている「地域の問題を解決する主体的な市民」というシティズンシップ教育の理念にとって必要不可欠なものであることを示す。

## 2. ミルズの高等教育批判

まず、筆者はミルズが高等教育機関をどのように考えていたか、という疑問に着手する。ミルズは高等教育について論じているが、それはまずアメリカ社会批判となっている<sup>2)</sup>。すなわち、過度な専門化による官僚制の拡大、大都市化によるコミュニティの喪失という事態である。ミルズがアメリカ社会批判を通じて高等教育について論じた原因は、ソースティン・ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) の高等教育批判からの影響だと考えられる。ヴェブレンは、制度学派経済学の代表的論者の一人であり、アメリカ経済の分析を行う研究者であった。だが、ヴェブレンは経済学の影響だけにとどまらず、アメリカの高等教育への批判を行ったことでも知られている。ミルズの著名な先行研究者であるアーヴィング・ルイス・ホロウィッツ (Irving Louis Horowitz) は、「アメリカの高等教育 (higher learning) の分析は、かなりヴェブレンの精神のなかに見られる」(Horowitz: 1984, p.122) と述べている。また、ミルズ自身もヴェブレンこそ「いままでアメリカが輩出してきなかでもっとも優れたアメリカの批判者」

(Mills, 1953, p.63) であると述べている。

では、「ヴェブレンの精神」とはどのようなものなのか。それは「批判的スタイル」と呼ばれるミルズの文体に現れている。ミルズは「批判」という態度をあえて示すことで、本来自明だと思われていたことへの深い考察を開始するのである<sup>3)</sup>。つまり「批判的スタイル」の効果は、単に社会や権力構造の批判を得られるということに留まらず、「批判的スタイル」を用いることによって「自分自身の創造性を刺激する」(West: 1989, p.133=292頁) こともできるのだ。ミルズの真のねらいとは、高等教育へと「批判的スタイル」を適用することで、当時のアメリカ高等教育、ひいてはアメリカ社会へと批判のまなざしを向けさせることにあったのである。

ミルズは、彼の方法論においてだけでなく、彼のアメリカ高等教育に対する着眼点においてもヴェブレンの影響を受けている。ヴェブレンが生きた時代では、高等教育では古典文学などのリベラルアーツを学ぶことが中心に据えられていた。これについてヴェブレンは以下のように述べる。

古典的な学問が学習者の製作的な習性 (workmanlike aptitude) を混乱させるように作用するという事実は、製作者精神—礼儀正しい理想の育成という大義に比べれば、ほとんど重要性をもたないものとされている—を身に付けている人々には容易に理解されるに違いない (Veblen: 1899, p.241=428頁)

つまりヴェブレンはアメリカの高等教育、より具体的に言えば古典文学等の教育とは、アメリカ社会の「有閑階級」(leisure class) によって形成され、彼らのためにあると考えたのだ。「有閑階級」とは、一言で言えば生産的な労働をしない階級である。彼らにとって高等教育は、生産的な労働をしないということの顕示としての意味を持つ。すなわち、古典文学等の教養を持つことは、自らが労働に従事していないことを表しているのである。これはヴェブレンにとって批判すべきことである。

当面の問題 (the question in hand) は、このような学問分野 (一般教養) が、したがってまた、教育システムのなかでそのような分野の支持する観点が、現代の産業的な環境の下で、効率的な集団

生活をどの程度まで助長したり妨げたりしているか (Veblen: 1899, p.240=426頁)

つまり、当時のアメリカでは高等教育が「有閑階級」に独占されており、これはヴェブレンには産業の能率に資しておらず、人々の生活の役に立っていないようにみえたのである。ただし、ここでヴェブレンは「有閑階級」的な高等教育をやめて、役に立つ学問にすれば十分であると主張したわけではない。むしろヴェブレンは、アメリカ社会は創造的民主主義とコミュニティの伝統にこそ好意的であり、それらに対立しうる経済的な繁栄を盲目的に追求していた社会については批判的であった<sup>4)</sup>。

このヴェブレンの高等教育批判が、ミルズにも受け継がれている。ミルズもヴェブレン同様、高等教育の「有閑階級」による独占も、高等教育が経済的なもののための単なる手段になることも批判している。しかし、具体的に両者が注目したものは異なる。ヴェブレンが注目したのは機械化の過程による営利企業の台頭であるし、ミルズが注目したのは過度な専門化や官僚化であった。高等教育の経済的なものに対する従属は、反省や討議といった民主主義的理念ではなく、効率や直接役立つ技能 (skill) などの価値の重要視につながる。高等教育が経済的なものに従属すると、市民は政治的な活動や自発的な社会改良よりも、むしろ企業や国家が利用しやすい存在として教育されるようになるのだ。ミルズは以下のように述べる。

極めて大まかに述べれば、アメリカで最初に制度化された教育の機能とは、政治的なものが主であった。すなわち、それは市民に知識を身に付けさせることと、よりよい思考を可能にすることである。ところが、現在の教育の機能は、政治的なものから経済的なものへと中心が移り変わった。すなわち、よりよい賃金労働のために人を訓練することである。高等教育の動向はそれによく関連しており、企業経済のためにホワイトカラー的技能を求めると合致し、それは公衆を使い果たすものである。(Mills: 1954, p.368=294頁)

ミルズはアメリカ社会および高等教育を批判したが、それはアメリカ社会の教育が経済的なもの中心になったことへの批判だったのである。ただし、ヴェ

ブレンとミルズとでは生きた時代が違うことは注意しておくべきである。ヴェブレンの時代ではアメリカ社会は経済的なものが優位になりつつあるだけであったが、ミルズの時代には経済的なものはやアメリカ社会を覆い尽くしていた。先に述べたヴェブレンとミルズの具体的な注目対象の違いはこの時代の違いに由来する。ミルズにとって、アメリカ社会は企業や官僚制といった少数のエリートに支配されていることのほうが、より重要な問題であるように思われたのである。ミルズはアメリカ社会へヴェブレンとは異なった次元で危機意識を持っていたのだ。

以上のように、ミルズにとって高等教育はアメリカ社会の批判とつながっていたのである。高等教育は、アメリカ社会ではかつては「コミュニティ」の理念が実現していた場所だったのに、やがて「有閑階級」のものとなり、そして経済的なものに従属するようになることで、その理念を終わらせてしまったのだ。かつて「コミュニティ」の理念が実現していた頃は、高等教育はアメリカ社会にとって重要な討議や反省といった民主主義の理念を実現する場でもあった。アメリカ社会は、そのような高等教育の場を自らの手によって終焉させてしまったのである。以上のように、ミルズは高等教育を批判することで、アメリカ社会の問題点を浮き彫りにした。

### 3. 「公衆のコミュニティ」と討議

次に、筆者はなぜミルズが「都市問題」という地域性・特殊性の強い問題を取り上げるのか、という疑問について答えよう。結論からいうと、ミルズは「都市問題」を、「公衆のコミュニティ」(community of publics) という具体的な公共的争点について討議する共同体のなかで解決されるはずのものであると考えていた。ミルズにとって民主主義社会およびコミュニティの担い手は、「公衆」であった<sup>5)</sup>。

ところで、「公衆のコミュニティ」とは、どのようなものなのであろうか。また、「公衆」でない者とは、一体どのような存在なのであろうか。ミルズは以下のように述べている。

公衆は直接的な生活環境のなかで生活しているが、個人的には、知性と教養によって、それを乗り越えることができるし、社会的には、討論と公

衆としての社会的活動によってのり越えることができる。反省と討論をつうじて、また、組織的活動をつうじて、公衆のコミュニティは自らを意識し、実際に、構造的な関連のある問題点で積極的に動き出すようになる。これに対して、大衆の成員は、直接的な生活環境のなかで生活しているけども一極端なばあいオートバイにまたがった役人による「組織化された自発性」にもとづく以外、精神的にも、また、具体的な行動によってもそこから出ていくことができない。(Mills: 1954, p. 366=291頁)

ミルズにとって、「公衆」とは私的 (private) — 公共的 (public) という二つの次元を往還して思考できる存在のことを示している<sup>6)</sup>。それに対して、「公衆」と対極な存在とされているのが「大衆」(mass)である。「大衆」とは、私的なことという一つの次元からしか思考ができない。このように、「公衆」とは、直接的な生活環境やせいぜいマス・メディアによる一方的な情報でしか思考することができない大衆に対して、自己の生活経験という私的な次元とより広い政治的・経済的な争点という公共的な次元の関係を理解することができるのである。つまり、都市のコミュニティにおいて様々な問題が生じうるが、その問題を自分の思い込みやそれまで見聞きした経験だけを手がかりとして考えるのが「私的」領域のみに生きる「大衆」であるのに対して、公衆は自己の思想や経験のみでなく努めて他者の思想や経験を知らうとし、また都市政策や科学といった客観的な視点を用いることで、自己内省を常に心がけるのが「公衆」である。

そして、公衆に私的および公共的な次元を往還して思考させることを可能にするのが、「公衆のコミュニティ」に他ならない。というのも、「公衆のコミュニティ」は、自己内反省と討論により自己の思考を深めることができる場だからである。すなわち、自己内反省は、個人的な生活経験を自己の反省を通じて理解し変容することであり、討論とは自己と他者とのコミュニケーションを通じた自己とは異質なもののへ触れることでの変容と言える。ただし、ここで言う「討論」とはハーバーマスの述べるような合意形成をめざす討論とは異なる<sup>7)</sup>。ミルズは「無数の討論サークルが意見を伝達する活動家によって結び合わされ、より大きな支配権を獲得するために論争が

展開する」(Mills: 1954, p.356, 357=284頁) ことが民主主義社会だと述べる。ミルズの述べる討論は合意形成という理性的なものであるよりも、異なる人間同士が討論するものである。つまり討論とは、異質な他者や自己の気付かない部分を自覚することによって、差異を際立たせる対話と言える。以上のように、ミルズは「公衆のコミュニティ」という場を考えている。その場は、まさに「自己、他者がコミュニケーションすることでの、自己および他者との対話」を引き起こす場なのである<sup>8)</sup>。そして、「公衆のコミュニティ」という場こそが、ミルズの求めたアメリカ伝統の民主主義社会の理念に他ならない。

ここで疑問が生じる。ミルズの「公衆」および「公衆のコミュニティ」という理念は、「大衆」という存在と対比されて示されている。だが、なぜミルズは「大衆」を「公衆」と対置させたのであろうか。また、ミルズの述べる「公衆のコミュニティ」はどこで実現されうるのか。そこで注目しなければならないのが、ミルズの述べる「大都市」(big city) である。というのも、「大都市」は20世紀のアメリカにおいて大衆社会を進めた原因として考察されているからである<sup>9)</sup>。ミルズは以下のように述べる。

大都市を形づくる力は構造的な力である。

しかしながら、「市民」がもつ知識とその実際の行為とは分散した局部的環境に限定されている。

それが、大衆社会と呼ばれているものとその主要な展開の場たる都市の適切な定義であるように思う。(中略)われわれの都市は狭い断片からできており、そこに住むものとして自分自信のむしろ狭い範域にますます閉じ込められている。各々がその閉ざされたサークルの中に落とし込まれており、一目みれば自分と同じものだと思われる集団からひき話されている。(Mills: 1959a, pp.397, 398=317頁)

大都市において、市民は孤立させられている。その孤立とは単に集団から離れているという意味ではない。それは、市民が公共的なものから離れているということである。アメリカ社会では、コミュニティによる参加型の民主主義が機能していたが、そのような参加型民主主義がなくなることで個々人は政治的なものに触れる機会が失われたのである。その結果、市民は自己の環境のみでしか思考することがで



きない「大衆」となるのである。では、ミルズは大都市の問題をどのようにして解決しようとしたのか。それこそが、私的問題 (private troubles) と公共的争点 (public issues) という視点に他ならない。大衆は、「個人の心に抱かれている諸価値がおびやかされるとき感知される」(Mills: 1959a, pp.395, 396=315頁) ような「私的問題」にのみ関心がある。それに対して、公衆は「公衆の心に抱かれている諸価値がおびやかされてはじめて感知する」(Mills: 1959a, p.396=315頁) ような「公共的争点」に関心をもつことができる。ただし、「公衆の諸価値」とは、はじめから公衆個人に抱かれていない。公衆は、大都市や国家を成り立たせる社会構造を、公衆間の討議によって提起することができるのである。すなわち、「公共的争点」とは、共同なものなのである。公衆はこの共同な「公共的争点」を持つことで、「公衆のコミュニティ」を形成することができるのである。

ただしミルズの「公共的争点」という視点は、社会病理の発見・解決という社会病理学 (Social Pathology) とはあまり関係がないことに注意する必要がある。ミルズによれば、社会病理学とは「直接環境のなかのバラバラの問題や事実を断片的にとりあげることによって、これらの本はより大きな成層構造 (stratification) または構造的全体 (structural whole) への焦点を欠いている」(Mills: 1943, p.527=408頁) のである。その結果、社会病理学は特定の価値観を前提として「非政治的」(apolitical) になるのである<sup>10)</sup>。ここでミルズが提起する「公共的争点」という視点は、むしろ「公衆のコミュニティ」の討議・自己省察を可能にする点で、政治的でなければならないのである。

#### 4. 都市問題から「カリキュラムの市民化」へ

それでは、筆者は最後の論点にとりかかりたい。その論点とは、高等教育が地域社会にどのように関与すべきか、という当初の問いである。結論から述べると、それは「地域問題を解決する主体的な市民」への教育に他ならない。ミルズは「都市問題」という具体的な場の問題を考えることの意義を強調していた。ミルズの高等教育論は、「公衆のコミュニティ」の構想である。それは高等教育機関という地域の中心が、地域の担い手としての若者を教育する

大学教育の場であり、成人が持続的に教育をする生涯教育の場でもある。

ここで、本稿の中心であるミルズの高等教育論を確認してみよう。ミルズは「公衆のコミュニティ」の理念を高等教育機関の中心に置いている。というのも、ミルズは高等教育機関が「公衆のコミュニティ」の役割である公衆間の討議の場となると定義しているからだ。ミルズは以下のように述べる。

大都市という構造のなかで、本当に自由で制約のないような深く広範な討議がない場合には、成人学校はそのような討議のための手厚い組織となることができ、そうなるべきなのである。成人のための大学は、そのような手続きが取られた場合のみ、自由であり、また同時に解放的 (liberating) なものになることが同時に実現されよう。そして、人々が彼ら自身のリアリティと世界を感じることができるようになるのである。(Mills: 1954, p.370=295, 296頁)

先にも述べたように、大都市は「私的問題」にしか自覚的でない大衆で満ちている。それゆえ、大都市は「公衆のコミュニティ」がない。そこでミルズは生涯教育・大学教育の場である高等教育機関が「公衆のコミュニティ」となりうることを提起した。高等教育機関とは、古典文学等のリテラシーのみを教える機関ではない。また、技術や固定的な価値観などを教える機関でもない。ミルズの構想する高等教育機関は、公衆が他者と討議すること、あるいは自己の異質性に自覚的であることを促す場に他ならない。このような観点について、ジルーはミルズによる提起を「学校におけるシティズンシップ教育の役割を再定義するだけでなく、批判的で活動的な市民という解放のための概念を傷つけるような経験や実践の最中にいる人びとがますます増やしたイデオロギーあるいは物質的な変化について位置づけを行った」(Giroux: 1987, p.108, 109) と述べている。「解放のための概念を傷つけるような経験や実践」とは、大衆社会化や官僚制・メディアにおける教育活動の画一化・押しつけである。先にも述べたように、ミルズは教育活動が少数のエリートによる批判した。ミルズは直接にはシティズンシップへ言及しないものの、ミルズは高等教育機関により「古典的リテラシー」や「技術や固定的な価値観」を教える既存の

固定化した社会ではなく、討議を中心とした「公衆のコミュニティ」を目指したのであり、それは異質な他者や自己の反省といったシティズンシップ教育の理念なのである。

だが、ここで疑問が残る。それは、高等教育機関が「公衆のコミュニティ」を構想するとしていったいどのように教育活動が行われるのか、というものである。そこでミルズが述べるのが、「非公式リーダー」(informal leader)という存在の意義である。「非公式リーダー」とは、公衆のコミュニティにおける討議を提起する存在である。それは、政治家や教員といった公式かつ公共的に政治的な提案や発議をおこす存在とは異なる。「非公式リーダー」は、サークルや集まりといった非公式な場において討議できる環境を整えるのである。だが、「非公式リーダー」のこれらの役割は地域社会にどのようなことをもたらすのか。ミルズは以下のように述べる。

成人のための大学の仕事は、そのような非公式リーダーとの接触につとめることだと思う。なぜなら、本当の公衆が育つのは彼らの周辺だからである。(中略)彼らは、コミュニティで、多くの公衆との連絡するようになる。それを通じて公衆を強化し、活発な公衆を助けることができ、また自己で学ぶプロセスを解放することができる。(Mills: 1954, pp.371, 372=296, 297頁)

このように、ミルズは「非公式リーダー」がコミュニティにいて討議が起きるという状態を構想している。そして、メディアや国家による教育活動だけでなく、コミュニティに根ざした争点が討議されるのである。だが、この提案はいささか具体性に欠ける。というのも、「非公式リーダー」がいたとして、どのような討議がなされるのであろうか。そして、果たして市民は政治的争点を話し合うだけで教育されると言えるのであろうか。

そこで有効になるのが、小玉重夫の述べる「カリキュラムの市民化」である。小玉は国家による教育を批判したが、その中で提起されたのが地域に根ざした市民による教育についての討議である「カリキュラムの市民化」なのである。「カリキュラムの市民化」とは、「カリキュラムをシティズンシップ(市民性)教育の視点から組み替え、その中心に政治的リテラシーを位置づける」(小玉: 2013, 168頁)こ

とである。どういうことかということ、従来の国家という公的なアクターによって一方向的に定められた教育内容およびカリキュラムを、教育委員会・教師・市民という地域のアクターが働きかけることで双方向的に決定されるようにするということだ。シティズンシップ教育とは、市民個々人が自己および他者の考えを知り、争点について考える素養を育む教育である。小玉は「いま、公立小学校の文化祭が総学習の成果発表の場になり、そこに市民が集まっていることは、そのささやかな兆候になるかもしれない。また、そうした動きが発展して、市町村の教育委員会や地域で教育学部を持っている大学なども参加して、地域のシティズンシップ教育や政治教育のセンターとのようなものがつくられることも展望されよう」(小玉: 2013, 199頁)と述べることで、地域社会の問題解決に高等教育機関が参画し貢献するヴィジョンを描いている。教育委員会・教員は単に国家からカリキュラムを押し付けられる存在ではなくなる。むしろ、ミルズの述べる「非公式リーダー」のように、市民へ積極的に教育を争点として提起する存在となる。これによってカリキュラムは地域にあったものに最適化されるのである。「カリキュラムの市民化」の意義はそれだけに留まらない。シティズンシップ教育は異質な他者や自覚されない自己へと触れることで変容をきたす教育である。「カリキュラムの市民化」によって、シティズンシップ教育の機会がもたらされ、「物事を批判的に判断したり、意見の違いを突き合わせ問題を解決したりしていく『政治的センス』が、市民に求められる」(小玉: 2013, 168頁)ようになるのである。以上がシティズンシップ教育における「カリキュラムの市民化」の理念であり、シティズンシップ教育の具体的な方法に他ならない。

その中で「カリキュラムの市民化」は、市民が自身で教育社会を構築するために政治的な思考をさせることができるという点で、シティズンシップ教育の方法として有効であると考えられる。だが、ここで疑問が残る。小玉の述べるような「カリキュラムの市民化」は、一体どのようなことを話し合うものなのであろうか。小玉は「放射線教育」のような論争的な争点の提起が討議を可能にすると述べる(小玉: 2013, 169, 170頁)。だが、「放射線教育」は論争的であるものの、それだけで地域に根ざした争点を浮かび上がらせられるのだろうか。そこで筆者は



ミルズの「知的職人性」(On Intellectual Craftsmanship, 1959c)の議論に着目したい。ミルズの述べる「知的職人性」は、社会科学的な思考をする能力である。鈴木によると、「知的職人性」とは、「生活と研究とを密着させ、相互に充実させようとするスタイル」(鈴木：1965, 303頁)であると述べている。つまり、「知的職人性」とは、自己の生活およびその経験を公共性のなかに投げ入れて考えるスタイルに他ならない。知的職人性は、自己の生活経験の反省を通して物事を言語化しようとする本能である。それは、自己および他者、経験、社会へ批判的視点を向けることを可能とするものである。特に筆者は次の引用部に着目したい。

君は完成した思想家というものが、自分の精神をいかに慎重にとり扱い、また精神の発達をいかに厳密に観察して、自分の経験を組織だてているか、ということに気づいているであろう。(中略)私は自分の経験に、安んじて疑いをもつことができるという点に、熟達した研究者の一つの目印があると考えている。(Mills, 1959c, p.196, 197=253頁)

ミルズは自己の生活経験に批判的であることが「知的職人性」によって可能であると述べている<sup>11)</sup>。先にも述べたように、自己の生活経験は都市社会の問題にさらされている。その結果、多くの大衆は自己の生活経験を「公共的争点」のなかで理解することができなくなっていた。「知的職人性」のある人は、自己の生活経験を「公共的争点」から理解することができる。また、自己の生活経験の言語化は、「カリキュラムの市民化」にも役立ちうる。「カリキュラムの市民化」は、政治的リテラシーに基づいた、異質な他者同士のコミュニケーションによって成り立つ。それは一方では自己自身の理解が必要であり、また他者を理解しようとすることを必要とする。そのためには、ある程度の言語化が必要であり、ミルズの「知的職人性」はその言語化を触発するのである<sup>12)</sup>。

以上のように、ミルズは「知的職人性」による生活経験の言語化および反省について論じた。「カリキュラムの市民化」は、争点について自己の経験と意見により討論する場である。それは同時に、自己の問題意識の意識化が必要である。ミルズは、討議にはまず「生活経験の言語化」という具体的なもの

が必要であると考えた。そして、それが「公共的争点」と対話を作り出すと考えたのである。以上の点で、ミルズは「カリキュラムの市民化」の議論に次のようなことを訴える。すなわち、「カリキュラムの市民化」には、まず生活経験の言語化と反省という活動が必要であり、そこから争点を浮かび上がらせる、ということである。その点で、ミルズの議論はシティズンシップ教育論を発展させる可能性があるものである。

## 5. おわりに

地域と高等教育機関は、ますます綿密な関係となると予想される。その中で高等教育機関は、従来の研究機関・大学生の教育機関であるというだけでなく、地域の問題解決のアクターとなることをはじめ、人と人をつなげること、そして市民による地域づくり(まちづくり)を促進する枠組みを作る役割が期待されている。

そこでミルズの高等教育論を考えることは意義深いことであるように思う。というのも、ミルズの高等教育論は、「都市問題」という具体的な地域の問題の考察に用いることができるからだ。「都市問題」は個人の私的問題として感受される。それを「公共的争点」との関わりで理解することが必要なのだが、ミルズは高等教育を個々人の生活経験というところを起点に考えているものであるということもできる。すなわち、高等教育は生活経験という具体的で個人的な経験を基軸とした、「公衆のコミュニティ」を形づくる学習社会を可能とするのである。佐藤は「自己実現、人々との対話や共感、学習をつうじての知識・技術・社会的能力の修得、相互の関係性の発展、自己と社会の架橋を構築する活動などをつうじて参加的に構築されていく生活世界における『公共空間』として広義にとらえる方が、民主主義的な市民的公共性の発展を担う生涯学習の可能性をいっそう明確に意義づけることができよう」(佐藤：2003, 14頁)と生涯学習について述べている。だが、ミルズの高等教育論を踏まえれば、高等教育機関のあり方は公共性を促進する場であることにとどまるものではない。高等教育機関は「公衆のコミュニティ」という市民の対話空間をそれ自体で創造する場であり、また自己の生活経験や異質な他者を対話で理解し争点について話し合い相互に自己や関係性や共同

な経験を作る場ともなる。つまり、それ自体が生活の場であり、絶えずそれを生成・発展させる場なのである。

ただし、ミルズの高等教育論には限界はある。ミルズの高等教育論は、現代と共通する「政治参加からの疎外」という問題への視点を持っているものの、現代社会でさらに問題となっている環境問題や人種問題、または情報化社会やグローバル化などの視点に欠いている。これはミルズの時代状況によるところが多いものの、高等教育の改革を行う際にはこのような社会動態も考慮しなければならない。だが、筆者は、ミルズの高等教育論がそのような場を個々人の生活経験や問題意識と接続する点で、今日の高等教育の変容の指針になりえるものであると考える。ミルズによる都市問題と高等教育の接続した高等教育論は、現代の都市と地方の関係を踏まえた高等教育の改革へと視座を与えるものである。

## 《引用・参考文献》

※ ミルズの文献については、必要に応じて改訳を行っている。

Giroux, Henry A., “Citizenship, Public Philosophy, and the Struggle for Democracy”, *Educational Theory*, 37(2), 1987, pp.103-120.

Horowitz, Irving Louis, “An Introduction to C. Wright Mills”; in *Power, Politics, People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press, 1963, pp.1-20. (=青井和夫、本間康平訳「C・W・ミルズについて」、青井和夫・本間康平訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年、17-32頁)

——— *C. Wright Mills: An American Utopian*, Free Press, 1984.

Mills, Charles Wright, “The Professional Ideology of Social Pathologist”, *American Journal of Sociology*, Vol.49 No.2, 1943 ; in Charles Wright Mills, Irving Louis Horowitz ed., *Power, Politics, People; The Collected Essays of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press, 1963, pp.525-552. (青井和夫訳「社会病理学者の職業的イデオロギー」、青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年、407-424頁)。

——— “Thorstein Veblen”, Thorstein Veblen *The Theory of The Leisure Class: An Economic Study of*

*Institutions (Mentor Edition)*, Mentor, 1953 ; in John H. Summers eds., *The Politics of Truth: Selected Writings of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 2008, pp. 63-77.

——— “Mass Society and Liberal Education” Chicago: Center for Study of Liberal Education for Adult, 1954; in Charles Wright Mills, Irving Louis Horowitz ed., *Power, Politics, People; The Collected Essays of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press, 1963, pp.353-373 (=本間康平訳「大衆社会と一般教育」、青井和夫、本間康平訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年、281-298頁)。なお、本稿では部分的に改訳している場合がある。

——— *The Big City: Private Troubles and Public Issues*, speech over the Canadian Broadcasting Company, 1959a; in Charles Wright Mills, Irving Louis Horowitz ed., *Power, Politics, People; The Collected Essays of C. Wright Mills*, New York: Oxford University Press, 1963, pp.395-402 (古城利明訳「大都市——個人的トラブルと公共的イシュー」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、1971年、315-320頁)。

——— *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959b (=鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店、1965年)。

——— “On Intellectual Craftsmanship”, Llewellyn Gross ed. Symposium on Sociological Theory, Row Peterson, and Company; in *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959c. (鈴木広訳「知的職人論」、鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店、1965年)

——— *Sociology and Pragmatism: The Higher Learning in America*, Irving Louis Horowitz ed., 1966, (本間康平訳『社会学とプラグマティズム』紀伊國屋書店、1969年)。

Veblen, Thorstein, *The Theory of The Leisure Class: An Economic Study of Institutions*, New York, 1899 (高哲男訳『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究』筑摩書房、1998年)。

West, Cornell, *The American Evasion of Philosophy: Genealogy of Pragmatism*, University of Wisconsin Press, 1989 (村山淳彦・堀智弘・権田建二訳『哲学を回避するアメリカ知識人——プラグマティズムの系譜』未来社、2014年)。

伊奈正人『C・W・ミルズとアメリカ公共社会—動機の語彙

論と平和思想』彩流社、2013年。

伊奈正人、中村好孝『社会学的想像力のために一歴史的特殊性という視点から』世界思想社、2007年。

小玉重夫『教育改革と公共性—ボウルズ＝ギンタスからハンナ・アーレントへ』東京大学出版会、1999年。

——『学力幻想』筑摩書房、2013年。

小松尚「本書のねらいと構成」、小林英嗣、地域・大学連携まちづくり研究会編著『地域と大学の共創まちづくり』学芸出版社、2008年、9-13頁。

佐藤一子「生涯学習における『公共空間』の形成」、佐藤一子編『生涯学習がつくる公共空間』柏書房、2003年、9頁-26頁。

——「地域学習の思想と方法」、佐藤一子編『地域学習の創造—地域再生の学びを拓く』東京大学出版会、2015年、1-23頁。

鈴木智之『「心の闇」と動機の語彙—犯罪報道の一九九〇年代』青弓社、2013年。

鈴木広「解説」、C・ライト・ミルズ著、鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋出版、1965年、301-314頁。

高哲男「解説」、高哲男訳『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究』筑摩書房、1998年、435-460頁。

高橋早苗「初期シカゴ学派とフィランソロビー」、宝月誠・吉原直樹編著『初期シカゴ学派の世界—思想・モノグラフ・社会的背景』恒星社厚生閣、2004年、225-243頁。

## 注

- 1) その代表的な存在として、シカゴ大学の社会学研究が挙げられる。初期シカゴ学派はジョージ・ハーバード・ミードらのハル・ハウスへの援助をはじめとした「セツルメント運動」などの社会運動ばかりでなく、ロックフェラー財団等から援助を受けることで、「単に純粋な『研究』を行うだけでなく、地域の社会的向上に一定の貢献をすること（地域への還元）をねらいとしていた」（高橋：2004、233頁）研究も行っていたのである。
- 2) ただし、本稿ではヴェブレンによる高等教育批判を直接に扱わない。というのも、本稿はミルズがヴェブレンの「スタイル」から影響を受けたということが中心であり、ヴェブレンの高等教育批判との関係性を考察しないからである。
- 3) 伊奈正人は、ミルズのヴェブレンからの影響を次のように説明している。すなわち、それは「こり固まった状況判断を変化させることだった。多元的国家を自負するアメリカにおいてファシズム的な権力一元化はまっ

たく関わりのないこととして考えられていた。自由、理性、多元性などの語彙により、そういう素朴な字部を絶対化し、隠しているアメリカ社会学を、ミルズは語彙分析を駆使して分析し、『隠された価値づけ』を対象化して、補批判している」（伊奈：2013、98頁）と述べている。ミルズはそのような「決まりきった語彙」を批判し、揺り動かそうとしている。そのためにミルズは「批判的スタイル」を用いているのである。

- 4) この点については、ヴェブレンの生きた時代状況について考えなければならない。すなわち、ヴェブレンは19世紀から20世紀にかけてのアメリカの「金びか時代」を生きており、「アメリカ社会全体が農村的な社会から都市的な社会へと大変貌を遂げつつあったのであり、自動車やラジオの普及こそまだであったが、間違いなく現代的な大衆消費社会がきらびやかに登場しつつあった」（高：1998、442頁）のである。ヴェブレンは『有閑階級の理論』で掠奪文化的な「有閑階級」を批判しているが、そこには「金びか時代」に代表される虚飾の文化への批判的視線が向けられているとミルズは述べている（Mills: 1953, p.71）。
- 5) ミルズは「公衆」を民主主義社会の中心であると定義しているが、これはジョン・デューイ（John Dewey）の公衆論からの影響である。ミルズはジョン・デューイの『公衆とその諸問題』（*The Public and Its Problem*, 1927）の次の箇所を引用している。それは、「われわれが『コミュニティ』の崩壊—および、とくに、合理的に基礎づけられた権威の諸条件（国家の機能や法律がどのようなものか、筆者補足）—から分析をはじめたようにそれは、民主主義と同一視される『公衆』という題目のもとにコミュニティを制度化し直すということ」（Mills: 1966, p.439 =322頁）である。つまり、ミルズはデューイのように「公衆」の問い直しによって民主主義社会およびコミュニティを再考しようとしているのである。
- 6) 本稿では、ミルズの個人的、および社会的という用語を、以下で論じられる私的問題(private troubles)—公共的争点(public issues) という図式に当てはめて解釈している。というのも、ミルズは『社会学的想像力』（*The Sociological Imagination*, 1959b）をはじめ、多くの著作・論文において、公衆の思考方法として私的問題—公共的争点という図式を提示しているからである。ただし、ミルズは問題という言葉には“private”ではなく、“personal”という言葉を用い、また「争点」という言葉には“public”ではなく“social”という修

- 飾語を用いる場合もあることも注意されたい。例えば、本稿でも引用する「大衆社会と教養教育」においても、同様のことが見られる（Mills, 1954, p.370, =295頁）。
- 7) 小玉は、シティズンシップ教育が共同体を前提とした理論が見落とした異質性や多様性へ着目することを目指してきたと述べる（小玉：1999 218頁）。それは、理性的な討議や合意形成という、近代主義的な民主主義・共同体観に立ってきた従来の議論とは距離を置くものである。ミルズは討議や反省という理念を用いているという点で、近代主義に立っているように思われる。だが、むしろミルズは討議や反省という理念によって自己とは異なる他者と出会うことからの変容を意図している。このような点で、ミルズは近代主義とは距離を取っていると考えられる。
- 8) コーネル・ウェスト（Cornell West）は、ミルズを「エマソンの文化を引き継いだデューイ主義者」とであるとミルズを定義しているが、それは「批判的知性と創造的民主主義というデューイの理想を通して提示される」（West: 1989, p.137=304頁）ものである。また、ホロヴィッツもミルズを「アカデミーの挙例に痛烈な非難を行った点」（Horowitz: 1963, p.7=22頁）や「かれの逞しい肉体と精神とは、学問の世界の外にあるより大きな現実の世界を思い起させ、関心をかりたたせる」（Horowitz: 1963, pp.7,8=22頁）ものであった。すなわち、ミルズはエマソン、デューイによるアメリカの伝統的な「討議による民主主義社会」「批判的スタイル」という理念を受け継いでいるのである。
- 9) ミルズは「公衆のコミュニティ」の理念を大都市の「公共的争点」の討議によって実現しようと考えていたが、これはミルズのジョン・デューイのコミュニティ論批判が含まれている。ミルズはデューイのコミュニティ論を「農村」の時代のものであると述べた上で、「かれは未来について多く語ってきたが、かれの歴史的な時代感覚は、はるか過去のコミュニティに理想を現代の条件にあてはめようと試みてきた」ものであると述べている（Mills: 1966, p.443=328頁）。
- 10) 伊奈はミルズの政治的なものへの視点について次のように述べる。それは、「アメリカ社会の平等性・多元性を主張する言説に対し、アメリカ社会の不平等性・画一性を主張し、社会構造論的視点の重要性を主張する」（伊奈：2013, 131頁）というものである。ミルズはアメリカの平等で多元社会というイメージを作り無批判な社会病理学の方法論へ批判を加えるために、異質性・他者性という政治的なものを導入したと考えられるのである。
- 11) 「知的職人性」はアカデミックな研究者、あるいは専門性を持った知識人が持つ資質であるように思われるが、ミルズは必ずしもそのように限定していない。『社会学の想像力』のなかでミルズは「ジャーナリストや学者、芸術家夜公衆、科学者や編集者」（Mills: 1959b, p.5=6頁）などの幅広い人々へ自身の社会学の意義を見出していた。
- 12) 鈴木智之は、ミルズの言語的な社会学の方法論について考察している。それは、「物語の形で出来事と出来事の“つながり”を表現し、その語りを聞き取り、繰り返し語り直すことによって、何がこの社会で理解可能な動機であるかを学んでいく。動機が理解可能であるということは、状況（または起動原因）と行為（または構築原因）と結び付ける“物語的共通感覚”が作動していることだ」（鈴木：2013, 149頁）と述べている。